

## リレ - 随筆



## 江戸末期の和本

横澤 宏一\*

生体医工学とはおよそ関係ないトピックで申し訳ないが、江戸末期の和本を話題にしたい。古書店で手に入れた木版刷りの本が何冊か手元にある。「永代年代記大成」という本は当時の実用百科であるらしく、最初のページにカラー刷りの世界地図が載っている。陸地の形は多少歪んでいるが、それほど違和感はない。キャプションには「南北に二十五里直線移動すると北極星の高さが一度変わる」なんて書かれている。もちろん外国の書物からの翻訳であろうが、江戸末期の知識人は、地球の大きさや世界の中の日本の大きさをかなり正確に知っていたのではあるまいか。

「諸御役目録」という本もある。幕府の役人を網羅した名簿である。老中、若年寄、側用人などの重役は字も大きく、家紋、石高、登城日などの詳細が記されている。一方、扱いは小さいが、奥医師、祐筆、鷹方、お伽衆、坊主衆、お庭番など趣深い役職もたくさん載っていて、眺めて

いと楽しい。出版年は天保 11 年 (1840 年) 頃らしく、少し調べてみると桜吹雪で名高い遠山金四郎 (景元) が北町奉行だった時代に重なる。將軍は 12 代家慶だが 11 代家斉も存命中である。さらに子細に眺めると、遠山金四郎の敵役として有名な鳥居耀蔵が目付として載っている。南町奉行に就任して遠山金四郎と対峙する直前ということになる。

先代將軍にも老中、若年寄からお庭番に至るおびただしい諸役人が配され、権力が二重構造になっているのがわかる。この精緻だがややこしい職制は次第に時代に合わなくなり、外国船も出沒して、大塩平八郎の乱や蛮社の獄が起きた時代でもある。テレビ番組では遠山の金さんは時代劇、黒船来航は明治維新ものとして扱われるが、遠山金四郎が江戸町奉行を辞してからペリーの来航まで、わずか 1 年でしかない。歴史でも個々の人生でも、その時に認識できる転換点より、思い返せばあの時が転換点だったと後からわかることは往々にしてある。未来が見通せない分だけ、時間軸上で大局的に考えるのはより難しい。170 年前にこれらの本を初めて手にとった当時の知識人たちも、世界のありようはある程度知っていたかもしれないが、もうすぐ「江戸時代」が終わるとは思っていなかったに違いない。

(\*Yokosawa K 北海道大学大学院保健科学研究所健康科学分野)



## 娘と私の夢

穴田 貴久\*

「ゆっちゃんは大きくなったら歯医者さんになる。」と 4 歳の娘が言い出した。それまではアニメキャラクターやアイドルになると言っていた娘が急に現実的になったので正直驚いた。どうやら、虫歯の治療で女医さんに診てもらったことがきっかけのようだった。その娘が、「パパの夢は何？」と無邪気に聞いてきた。すると妻が、「パパの夢はもう叶っているのよ。」と娘に一言。そう言われて何か不思議な気持ちになった。確かに十代の頃の私の夢は研究者になることであった。しかし、紆余曲折が有り、教育学部に進学したのだが、やはり研究者になりたいと一念発起し、猛勉強して他大学の大学院に進学した。工学博士取得後、ポスドク研究員として研究者の第一歩を踏み出した。その後、幸運なことに現在の大学に職を得ることができたのは 10 年前のことだ。不思議な気持ちになったのはおそ

らく夢が叶ったという言葉に終着を感じたからではないだろうか。ところが、今の私はと言えば、あの頃の夢が叶った喜びなどとうに忘れ、終着どころかもがき続けている真っ最中である。

現在、私は組織工学、再生医工学分野の研究を主に行っている。細胞は生きた機能性材料であるという視点に立ち、移植可能な三次元組織体構築法や変化 (分化) を人為的に制御する培養デバイスを開発している。また、歯学部という臨床現場に近い環境から臨床応用に向けた骨再生担体材料開発についても精力的に進めている。最近になり新たな幹細胞の開発など幹細胞生物学の進展が著しいが、幹細胞をいかに機能的で生存率が高い状態で移植まで持って行くのかという点に関してはまだ課題が多い。この課題に対して工学的アプローチは大きく貢献できると考えている。再生医療や基礎生物学に貢献する新たな材料、デバイス、技術を実用化して世に送り出すというのが現在の研究者としての夢である。一方、私の両親が自分の息子を信じて好きなようにさせてくれたように、私も娘たちに自分の夢を見つけ、それを叶えられるような環境を作ってあげる。それが親としての夢である。

(\*Anada T 東北大学大学院歯学研究科顎口腔機能創建学分野)